不落の龍神

グー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
不落の龍神

【Ｎコード】
Ｎ６９５９Ｒ

【作者名】
グー

【あらすじ】
地下コロシアムで最強を誇っていた”不落の龍神”こと龍宮空。ある日の帰り道”悪魔”と出会い、成り行きのまま戦闘。圧倒的な力を見せつけるも逃亡。それに巻き込まれた先は異世界でー・・・。「小説家になろう」をみていて異世界トリップ主人公最強ものが書きたくなりました。
拙い作品ですがよければどうか読んでください。
主人公最強ものです。多分ハーレム要素もあります。苦手な方はご注意ください

1．さよなら地球

俺は龍宮空、高2だ。家が古武術を伝承する古い家で俺はその家で小さい頃からすげー修行をさせられていた。強くなっていくのがうれしかったから全く苦に思ったことはなかったけどな。だけど俺が中1の時に親父や爺さんを手加減なしの組み手で倒してしまった時は針のむしろのようだった。その翌年に俺が開祖以外誰も習得したことがなく、秘伝書でのみ伝わり夢物語だと思われていた。秘奥を習得したときには何か吹っ切れたのか親ばか、爺ばか全開になったんだけどな。

だから俺にはこと”強さ”に関しては些かならぬ自信がある。並々ならぬ興味もある。しかし特に日本では、異常な存在は排除されるという風潮があるため日常的には運動神経がいいだけということにしておいて、深夜に地下コロシアムで殺し合いという緊張感の中技を磨いている。

地下コロシアムでは会場内で、決まった対戦カードで、という制約はあるものの不意打ち、暗殺何でもありという異常な空間だ。対戦相手が決まった瞬間から警戒が必要になってくる。対戦相手が発表になった瞬間後ろから首を落とされたやつもいる。

そんな中で俺は現在序列1位、中2で序列1位になって以来3年間1度も明け渡したことがないから名前をもじって『不落の龍神』なんて言われて一目置かれていたりする。

そんな俺だからあの時も楽勝だと思っていたんだー・・・

地下コロシアムからの帰り道、時刻は午前2時。俗に丑三つ時とか

逢う魔ヶ刻とか言われる時間。闇夜に紛れる様に”それ”はいた。
”それ”は後ろ姿であったが目前のカップルに狙いを定めているようだ。今にも腕を振り下ろそうとしていた。
俺は考える暇もなく全力でアスファルトを蹴り、そいつを軽く小突いた。（全力で殴ると殴った場所が消滅してしまう）そいつは近くの民家の塀にぶつかり塀に軽く亀裂が入っていた。
街灯の明かりに照らされそいつの姿が露になる。

「ー・・・っ！！」

思わず息を呑む。
街灯に照らされたその姿は緑の肌に紅い目。頭上には1対の角が天を突いており背中には黒い翼が生えていた。
まさに想像上の悪魔の姿であり、そんなやつを俺は今までに見たことがなかった。

「ヒッッッッ！！！」

カップルは悲鳴を上げ逃げ出してしまった。
俺はそれを横目で見ながらも目の前の”悪魔”から警戒を外すことができない。
しかし強者特有の雰囲気はあるやつだが威圧感はない。おそらく問題なく勝てるだろう。

「キサマ、イッタイナンダ」

突然頭に直接響くような声が聞こえた。抑揚のない喋り方。
目の前の”悪魔”のものだろうか？状況から見て恐らくそうだろう。
人生何があるかわからないな、こんなやつとコミュニケーションをとるとは思わなかった。

「コタエロ、イッタイナンナンダ」
なかなか答えない俺に痺れを切らしたのか再び先ほどと同じ声が聞こえた。
「何だと言われてもね、正義の味方だよっと！」
喋り終わると同時に踏み込む、相手の実力を測りきれていないため１割程度の力で打ち込む。
狙いは水月、捌くか、それとも躱すかおまえはどうする？
しかしそんな俺の予想を覆し、拳は”悪魔”の水月に吸い込まれていった。
ガスッ！
「グハッ！ガ・・・ガハッ！！！」
・・・どうしよう、めちゃくちゃ咳き込んでる。こいつ、弱いぞ？
雰囲気だけかよ
しばし拳を眺め呆然とする俺。
そのうちに息が整ったそいつが立ち上がりを俺を睨んできた
「ナンダソノチカラハ？マァイイ、ユダンシタヨウダ。シカシコノワタシニイチゲキイレタコトニケイイヲヒョウシテジゴクノホノオヲミセテヤロウ。」
そういいながらそいつは俺に向かって手を突き出してきた。
まずい！何かするつもりか！

『ヘルファイア』

”悪魔“の声が辺りに響く。咄嗟に俺は横っ飛びをする。受け身をとり、目を相手に向け現状把握。
しかし俺の目が捉えたのは”あいつ”の手から出ているライターくらいの火だった。
三度呆然とする俺。
何だよこいつ、見かけ倒しかよ。しかもそんな相手に過剰に反応した俺って・・・

「ははっ」

自嘲の笑いが思わず零れる。
何だよ、それなら軽くしめて帰って寝るか。
再び地を蹴り、相手に飛び込もうとした時焦ったような声が響いてきた。

「ナ！ハツドウセンダト！？サキホドカラフシギニオモッテイタガココライッタイカラホトンドマリョクヲカンジナイダト！？ク、ココハイチジテッタイダ」

”悪魔”はステップで俺から距離をとり手のひらの間に黒い球体を出現させる。
俺はそれを先ほどの”悪魔”の言葉から逃げるためのものと判断。

「逃がすかよ！」

ステップで”悪魔”に肉薄し、軽く吹っ飛ばして終わりだ、と思ったその瞬間。先ほどの黒い球体が突然大きくなり俺と”悪魔”二人の体を飲み込んだ。

その後のことはよく覚えていない。視界が真っ暗になったかと思うと、上下左右あらゆる方向に引っ張られたり揺れるような感覚を味わったかと思ったら

「何だここは・・・」

見渡す限りの荒野だった。電線もなければ家屋もない。
それにやけに体が重いし、思考にも靄がかかったような感じがする。
直感的に分かる。おそらくここは少なくとも日本、いや、地球ですらないだろう。
空や陸上に生物がいくらか存在しているが俺の常識の中には存在しないような色や形をしている。
俺が思考に埋没していると後ろから急に声がかかる。

「ようこそ我が世界へ、歓迎しよう”異世界人”よ」

・・・。
・・。
・。
さよなら地球

1．さよなら地球（後書き）

いかがでしたでしょうか？
感想、評価、アドバイスなどなどお願いします！

2．”悪魔”との　（前書き）

初めての戦闘シーンです

2．”悪魔”との

心の中で地球に別れを告げ、後ろを振り返るとそこにはやはりと言うべきか先程の“悪魔”が立っていた。
何やらニヤニヤしているが、先程より明らかに威圧感が増している。
少し警戒していると徐にやつが口を開く。
「そんなに警戒しなくてもいいよ、まずは少し話そうじゃないか。僕としても久しぶりの客人で嬉しいんだ、まぁ君が勝手についてきたんだけどね」
「なんだと？」
「話だよ話、色々気になってる事もあるだろうし質問にも答えてあげるよ」
「…ふん、なら色々聞かせてもらおうか。まずここはどこだ？」
「それは君も予想してるんだろう？異世界だよ、まぁ僕からすれば君の元いた世界が異世界なんだけどね。世界の名前は“アルメリア”そしてここは魔族の住む魔界、その僕の城近くさ。」

やはり異世界なのか、もう一度さよなら、地球。
まぁそれは半ば確信していたからいいだろう。
それにしてもペラペラとよく喋るヤツだな、好都合だが…。

「何故か体が重くて、頭に靄がかかったみたいなんだがこれは？」

その質問をすると一層声の調子が嬉しそうになった。
どうやら聞いて欲しかったみたいだ、なんだこいつは。

「それはね、魔力に体が慣れてないんだよ。君の世界には魔力がほとんどなかったからね、だけどこの世界には魔力が溢れている。魔力はそのままだと生物に負担をかける、だから魔力に慣れないと普

段の力を出せないんだよ。ちなみに僕達魔族にとっては魔力が生命源だからないと逆に力を出せなくなるんだけどね。さぁ、僕が何を言いたいか分かったかな？」

そういう事かよ、ペラペラ喋ってたのは余裕の現れってことか。本格的に体が重いからな、こりゃヤバいかも知れない。

「俺はここで死ぬ、か？」

「正解！」

その声と同時にヤツが飛び込んでくる、早い！

狙いは水月か！真っ直ぐヤツの右拳が迫る、左手で払おうとするが間に合わない。

「グッ！」

く…重い。間髪を入れず左のハイキック、これも避けられず俺は地面に沈む…ことも許されず膝での蹴りあげ、アッパー、フック、後頭部に肘打ちを落とされ、ようやく地に伏すことを許された。

「ガッ！グッ！ガハッ…ハッ…ハッ…ハッ！」

「君には二発殴られたからね、三倍返しだよ。」

あ～まさか魔力の影響がこれ程とはね、この俺が手も足も出ないなんてな。世界は広いな。

だけどいつまでもこのままやられっぱなしなんて俺のプライドが許さない！

「ふん、意外と呆気なかったな。最後に今度こそ地獄の炎を見せてあげるよ。」

《ヘルファイア》《ヘルファイア》《フェニックス》

ヤツは俺に興味を無くしたようだ。声色が急に冷たくなったかと思うと、

両手の平を俺に向けそれぞれが俺が二、三人入りそうな炎を出すとそれを合わせた。そこには燃え盛る鳳凰が顕現していた。

…普通ならこれで終わりだろうな。仕方ない、枷を解くか。

「さて、何か言い残すことはあるかい？」

「ふん、それはお前の方だ！見せてやるよ、龍宮流無差別闘法、心の章《枷外》！」

「それが遺言でいいのかい？じゃ、さよなら」

俺は一度目を瞑り、まず自分の体全てを把握する。筋肉、骨格、神経、内臓、血液、チャクラの流れなど全てだ。そして、臍の下あたりと、脳のあたりに一度溜め、その後猛烈な勢いで循環させる。すると頭の奥の方から何かが割れるような音が聞こえてきた。

…外れた。

その間にヤツは鳳凰をこちらに向けていたようだ、既に鳳凰は俺に肉薄している。

俺は手刀を頭上に振りかぶり、勢いよく降り下ろした。

鳳凰は手刀に沿って真っ二つに割れる。もちろん俺は無傷だ。

「な、なに！？そんなバカな！？」

ヤツは驚いているが既に俺はヤツの視界にはいない。

背後に高速で移動したのだ。

「冥土の土産にもうひとつ！龍宮流無差別闘法、技の章奥伝《朱雀》」

背後からヤツを蹴りあげる、俺も翔び、蹴りあげ続ける。
二十も蹴り続けたところで肩を踏み台にしヤツより高く飛び上がり、そのまま回転踵落としを脳天に落とす。ヤツはそのまま地面に衝突し大地に深めのクレーターを作る。

あー、やっぱり魔力の影響って凄いのな。枷外しても全然力出ないや、まあまあ力込めたのに相手の原型残ってるもんな。ピクピクしてるから生きてるだろうし。

「その力…化物か」
「それはもう言われ飽きたよ、ところで俺元の世界に帰れるの？」

2．”悪魔”との　（後書き）

アドバイスや気になった点などなどよろしくお願いします！

3．僕の名前はウミ！（前書き）

3．僕の名前はウミ！

「ところで俺、元の世界に戻れるの？」
「戻すことはできるけど・・・君に大分ダメージを受けたからね。肉体を回復して、魔力を戻さないといけないから3ヶ月くらい待ってくれたら・・・」
「いや、いい」
「は？」

俺が否定の言葉を口にすると”悪魔”が目を丸くしてこっちを見ていた。あんなナリして意外と表情豊かなんだな。
しかし、俺はいくらこっちに来たばかりで魔力に耐性がなかったとしてもあれほど一方的にやられた自分自身に対して猛烈な怒りを感じているんだ。
元の世界では”不落の龍神”なんていわれていい気になっていたことも認めるが、俺も魔力やそれに”魔法”に興味がある。
俺も使ってみたい。

「俺は”強さ”というものに興味があってな、こっちには魔法や魔力というものがあるのだろう？俺も使ってみたいのだが使えるか？」
「そりゃ魔力に体が慣れてきたら多分使えるけど・・・、元の世界に帰りたくないのかい？」
「かえりたくない訳ではないがそれほど未練はない。あちらの世界では俺を震わせてくれるような強者はもういなかった。しかしこちらの世界では枷を外していなければお前にぼこぼこにされていた。魔法を使えるようになってもっと強くなりたいのと、強者と戦いたいがためにこちらの世界に残った。」
あちらの世界では何重にも枷を施していないと日常生活もままなら

なかったからな、この世界では今のところある程度自由に動けそうだし、何より楽しそうだ。目の前のこいつもある程度強かったしな。

「ククク・・・アッハッハッッ」

そんなことを考えていると突然目の前の”悪魔”が笑い出した。異様な勢いで笑っているけど大丈夫か？
しかし何がそんなにおかしかったのだろうか？理由もなくこれだけ笑われるとムカムカしてきたな。
ヤッチマウゾコノヤロウ

「なにがおかしい」
「いやいや、”異世界人”にしては面白い考え方だと思ってね。”異世界人”は”和”を尊ぶ考え方だと思ったんだけど。君に興味が湧いてきたよ」

そういうと”悪魔”の体が光に包まれ、そこには一人の美女が残されていた。
腰まである水色の髪ははよく艶があり枝毛一本なさそうだ、透き通るような白い肌という表現がここまで似合うのも珍しいだろう。大きな碧色の瞳は楽しげに細められ、朱を塗らなくてもなお紅い唇も緩やかな弧を描いている。女性を象徴する胸や尻はそれほど大きい訳ではないが、細くしなやかな死体とあいまってよく均整がとれており、女性らしさを十分に発揮している。
流石に俺が驚愕に目を開き言葉を失っていると、目の前の美女がより一層笑みを深くした。

「僕たち魔族は人形に姿を変えられるんだよ、どうだい美しいだろう？」
「ていうか女だったのか」

「男も女もないんだよ、興味を惹いた相手にあわせて姿を変えるから。だけど今後はこの姿に固定だ。僕を女にした責任は取ってもらうよ？」

そういい、やつは魅惑的な笑みを俺に向けてきた。
は？ていうか・・・は？
何を言っているんだろうこいつは？責任って何？そもそもどうやってとればいいんだ？
よほど俺の顔が疑問に染まっていたんだろう。やつがニヤニヤと笑いながらまた口を開く

「魔族はね、基本的に性別もなく、寿命もないんだ。魔力がなくなれば消滅するけどね。だけどそれだけじゃつまらないだろう？だから僕たち魔族は生まれた後一番興味を惹かれた相手を誘惑しようと、その生物に対なる存在に変化することができるんだ。獣なら獣、人なら人、雄なら雌、女なら男といった風にね。で、僕は君に興味を惹かれた、だから人間の女に変化したという訳さ。もうもとの魔族には戻れないから責任を取ってくれといった訳さ、ここまではわかったかい？」

・・・なんだかよくわからんが要するに俺に惚れたから俺に好かれるような姿になったってことかな？
その認識をそのまま口に出す

「その認識で概ね間違いないと思うよ。で、責任の取り方なんだけど、君が異世界に帰らないなら僕と一緒に過ごさないかい？強者に会いに旅に出るというならついていくし、体を休めるなら一緒に住もう。魔力の使い方や魔法、一般常識、といっても魔族の僕が知っている範囲でよければ教えてあげるよ？」

なんだか話がうますぎるような気がするが、こいつは俺に惚れているのだからこんなもんなんだろう。
それに俺にとって特に問題となる点はなさそうだ。
こんな綺麗な女ー元の姿を思い出さないようにする必要はあるがーと旅ができるなんて、俺の方から望みたいくらいだ。
それに俺もこの世界のことを知らないと生きてくことも大変かもしれないしな。まぁどうにかなるだろうけど。

「特に断る理由はないな、勝手にすればいい。俺は強者に喧嘩を売りに、もとい会いに行くつもりだ。どこに向かえばいい？」
「ここから3日程西に向かったところに人間の大きな町があるよ、まずはそこを目指そう」

おそらく西であろう方角を指差しながらそんなことを言う。
3日か・・・結構距離はあるが本気で走れば数時間でつくだろう。
疲れるから最後の手段だけどな、こいつがついて来れないかもしれないし。
あ・・・そういえば

「お前の名前はなんていうんだ？一緒に旅するんなら名前くらい教えてくれ」
「魔族のときの名前はウエルシフェルスだけど長いし、人間になったんだから君に名前を付けてほしいな」

確かに長いし呼び辛い・・・。だけどこの俺が誰かに名前を与えることになるなんてな。
思わず自嘲の笑みを零す。
俺が考えている間やつは期待するような笑みを浮かべている。

「よし！最初に言っておくが文句は受け付けない。お前はウミだ！」

「ウミ・・・ウミ、うん！僕の名前はウミ！これからよろしく！」

3．僕の名前はウミ！（後書き）

ネーミングセンスに関する苦情は受け付けません、
それ以外で感想、評価、アドバイスなどなどぜひよろしくお願いします！

4．突然の口付け（前書き）

設定説明の回です。一部ですが分かりにくいところがあれば教えてください

4．突然の口付け

俺は眼前の光景に目を奪われていた。目の前の美女―ウミ―がその整った容姿を崩してニコニコと締まりのない顔をしているからだ。

「アハハ、ウミ…ウミかぁ」

それだけ喜んでくれると名付け親としても名付けた甲斐があったってものだ。

しかしこれだけの美女から惚れられたとなると悪い気はしないな、思わず頬が緩むのを抑えられない。

俺がニヤニヤしていると一足早く我にかえったウミが話し掛けてきた。

「あ、そうだ、魔法についてとか教えるって話だったね。まずは一般常識からいこうか？」

「ああ、まぁ軽くでいいから教えてくれ」

「うん、まずこの世界の名前はアルメリア、君の世界から見たら異世界にあたるね。種族は大きく分けて魔、獣、人、天、精霊の五つ。中央に大きな大陸が一つあって、その回りを囲むように島が五つある。島にはそれぞれの単一国家が一つあって中央の大きな大陸には混成国家がいくつもある。それでここは魔の国“シェイド”その更に辺境の僕の城付近さ。」

ウミは一息つくと、分かったかな？といった顔でこちらを見てくる。肯定の意を示すために一つ頷きを返す。

ウミは満足したようで一層笑みを深めてまた喋り出す。

「で、魔力かな。闘ってるときも少し言ったけどこの世界には君の世界と違って魔力が溢れている。ま、この辺りは特に濃いけどね。僕達魔族は個体差はあるけど体内に魔力が溢れていて、魔力が生命源だから魔力があったほうが調子はいいんだけどそれ以外の種族は魔力に体が慣れないと本来の力が発揮出来ないんだ。で、魔法なんだけど僕達魔族は体内の魔力を使って現象を起こすからただ心の中で想像して創造すればいいんだ。だから魔族はそれぞれ固有魔法を持っているのが一般的だね。だけどそれ以外の種族は世界に溢れてる魔力、自分のものではない魔力を使わないといけないから詠唱したり補助具を使ったりして事象を起こさないといけないからある程度体系化されて伝わっているね、だからそれぞれの個体で固有の魔法は少ないね、種族毎に伝わってる魔法はあるみたいだけど。少し休もうか？」

俺の頭に疑問符が沢山浮かんでいたのを察したのかウミがそんなことを言ってきた。

バカにするな、と言いたいところだがその気遣いは適切なものであったことを認めざるを得ないだろう。

俺はそれほど理解力が良くないが自分なりに精一杯頭を捻って要点を理解しようと努める。

「つまり、俺は魔族じゃないから魔法を使うには呪文とかを覚えないといけないと、面倒だな。それに魔力に体が慣れるってどのくらいかかるんだ？素の状態だと体が重いし頭も重い。どうにかならないか？」

「う～ん、それは個体差があるんだよね…あ！それ全部一気に解決する方法があるんだけどどうする？」

ウミは困ったような顔をして話していたが話している途中で悪戯を思い付いたように目を輝かせている。
…あの表情が気になるが手っ取り早く強くなれるならそれに越したことはない。
多少のリスクはあるだろうがそんなことは関係ない、望むところだ。

「ああ、それで頼…んむっ！！」

突然視界一杯に広がるウミの顔、大きな水色の瞳は閉じられていて長い睫毛が俺の頬を優しく撫でる。
細く柔らかな髪は首筋を撫で、その首には真っ白な両腕が絡められてきた。
口付けをされていると気付くのに時間はかからなかった。
その事実に思考が追い付いた頃俺の舌に柔らかく温かい、ザラっとした舌がねっとりと絡み付いてきた。
それと同時に体中に広がるこの熱さ、まるで体中がウミで満たされていくみたいだ。
気づけば俺はウミの背中に手を添え、その細い体を抱き締めていた。
二つの柔らかな膨らみが俺の胸で形を変え、ウミから香る甘い香りで頭がクラクラする。
俺の方からもウミの舌を貪り、口内を蹂躙しどれだけたっただろうか。
どちらからともなく離れる俺とウミ、見つめあう二対の瞳は潤み、熱が込められていた。

「いきなり…何を…」
「アハハッ、まぁしたかったってのが一番大きいかな？気持ち良かったでしょ？」
「ふざけるな」

気持ち良かったのを否定する気は全くないがとりあえず不満を言葉と表情で表してみた。
ウミは慌てた素振りも見せず言葉を足してきた。

「さっき言ってた方法だよ、メンドクサイのは嫌なんでしょ？だから今口の中から僕の魂と魔力の一部を流し込んだんだ。これで体内で魔力を生成出来るから身体能力も発揮できるし、呪文なんて必要なく魔法も使える。それに僕の魂に刻まれた魔法や魔力の使い方も君に魂レベルで刻み込んだ。理屈じゃなく感覚で理解出来ているハズだけど？」

そう言われてみれば体も頭も軽い。それにいつも意識している“気”と違ったエネルギーが体の中で渦巻いているのがわかる。それの使い方も確かに感覚でわかる。
これは強力な力だ。
思わず笑みが溢れる。
その姿をウミに見られていたようだ。

「気に入ってくれたかな？ちなみに僕の魂を一部あげたから君は“魔人”になっちゃったけど君なら別に気にしないよね？」
「ああ、いい気分だ。礼を言う。」

そんな些細なことこの力の前ではゴミの様なものだ。
さて、早速試してみるかな。

4．突然の口付け（後書き）

キスシーンに力入れすぎっていう（笑）
次回も説明が多くなるかもしれません

感想、評価、アドバイスお待ちしています！

5．魔法の使い方（前書き）

難産で文が散らかってますが少し間が空いてしまったのでとりあえず投稿。
その内改訂するかもしれません

5．魔法の使い方

「じゃあ早速魔法って言うものを使ってみるかな」

ウミから魂の情報とやらを渡されたから魔法の使い方も感覚レベルでわかるしな。
要するに考えたことが現実になるんだ。なんて便利な能力なんだ。
まずは定番のあの魔法かな。
小さい火種が掌から出ることを想像して大地に掌を向ける

「メラ！」

言葉と同時に掌から火が出た・・・が、でかい！
これはどうしたことだ、と思ったところで頭の中で答えが自然に出てきた。
ほんとに便利だな、と思いながらどうやら魔力を込めすぎたようだと判明。
しかし魔法が使えたことに嬉しくなる。しかも俺にはーウミの半分の魔力らしいがーかなりの魔力が備わっているようだ、どんなことでもできそうな万能感がある。
思わず掌をじっと眺めてしまう。
そこで横からウミの声がかかる。

「無事使えたみたいだね、どうやら思っていたより魔力を込めすぎたみたいだけど。君ならもうちょっと派手なことしそうな気がしたんだけど、随分こじんまりとしてたね？」

「ああ、俺の世界でポピュラーな魔法だよ。一度使ってみたくてね。」

「へえ？でも君の世界には魔力がなかったと思うけど魔法なんてあるんだ？」

「ゲーム、あ～と想像の世界のものなんだよ、俺の世界では使えはしないけど魔法は結構一般的なものなんだ。」

「魔力がないのに魔法が一般的？よくわからないけど君の世界は面白いところなんだね」

ウミがコロコロと声をあげて笑う。
そう言われてみれば変だな。どこから魔法なんて言う考えが出てきたんだろうか？
まぁいいか、そういうものなんだろうと納得することにするか。
じゃあ折角だからイロイロ使ってみることにするかな。

「ヒャド！バギ！イオ！ギラ！ライディン！」

言葉と同時に現れる氷塊、荒れ狂う竜巻、間断ない爆発、燃え盛る灼熱、落ちる稲妻。
また魔力の調節を忘れたせいでまるで地獄絵図のようになっている。
やりすぎたな、と冷や汗が流れる中ウミだけは楽しそうにその光景を眺めている。

「アハハ、すごいね。これも君の世界の魔法なの？」

「ああ、初級魔法ばかりだけどな。また魔力を込めすぎたみたいだ、修行が必要だな」

「まぁ僕の魔力は魔族の中でもトップクラスだからね、それの半分

でもはじめて魔力に触れる君には少し扱いづらいかもね。でもすぐに慣れるさ。あと補足説明しとくと、魔力は使えば使う程増えて行くよ、体力とかと同じだね。僕たち魔族は魔力が空になったら体が維持できなくなっちゃうけど、世界に溢れている魔力で少しずつ回復していくから死にはしないけどね。君は魔人で、人の要素も入っているから魔力は空になってもただ体内の魔力を使って魔法が使えなくなるだけかな。でもちゃんと詠唱とかすれば世界に溢れてる魔力で魔法は使えると思うけどね。」

・・・よくわからん。

要するに

・魔力は使えば使うほど成長し、使っても周りの魔力で少しずつ回復する

・魔族は魔力がなくなったら死ぬ、だけど周りに魔力があればセーフ

・魔人（俺）は魔力がなくなってもなんともない

ってことかな？まぁ間違ってても別にいいか

その後いろいろ試してみたけどルーラは無理、まぁ地理がわからないしな。回復系は傷に魔力でかさぶた作るのが限界、自分の魔力を使って創造するものだからな、この辺に限界があるのはしかたないか。

だけど逆に言えば想像できて創造出来るものであれば何でもできるって事だから何が出来るかは俺次第だな、色々考えてみよう。

「大体魔法の使い心地は掴めたかな？そしたら次の説明に移るけどいいかな？」

「ああ、頼む」

5．魔法の使い方（後書き）

感想、評価、アドバイスお待ちしています！

6．ウミの城（前書き）

すいません
仕事が忙しくて遅れました。

6．ウミの城

「と、言っても僕の知ってることで君に教えるべきことはそれくらいなんだけどね。ところで疲れてないかい？僕の城で少し休憩しようか」

言われてみれば少し喉も渇いてるし、大体地球で深夜にこっちに来てから闘ったりなんだりで確かに少し疲れている。
そこまで柔な鍛え方はしてないから動けないとかそういうことは全くないけどな。
それに確かに立ち話にも飽きてきた。

「そうだな、喉も渇いたし」

「飲み物だったら魔法で出せば？」

ウミはキョトンとした顔でそんなことを言ってきた。
おう、盲点。
しかし水を出すのはいいが器がないな、それごと出すか。
想像し、魔力を集中し創造する。
そして俺の欲しいものを端的に表現する呪文は…。

「エ〇アン」

そして俺の手には見慣れた透明のボトルとそれに詰まった水が握られていた。
…成功か、やはり既存のものは想像しやすいな。
ボトルの蓋を開け、喉を鳴らし一気に飲み干す。
…うん、記憶通りの味だ。当たり前か。

それに今回は魔力の調整にも成功したようだ。ほとんど魔力を使わなかったのがわかる。
と、ふと思い付いたことがある。やってみるか。

「どこでも〇ア〜」

勿論頭の中では効果音が鳴っている。
そして言葉と共に目の前にピンク色の扉が出てきた。
…どうでもいいが今の声真似は我ながら似ていたと思う。判定が居ないのが残念だが―。
ウミが興味深そうな目で見ているがとりあえずスルー。
俺は手応えから一つの確信を持って扉を開ける。

そこには見慣れた景色が広がっていた。
電柱にアスファルトの道路、何よりこの空気。
まだ数時間もたってないはずなのに久しぶりの景色に感じた。恐ろしいほどの郷愁感だ。
思わず言葉を失いその景色を見つめてしまう。

「あのっ！…き、君…は…僕と一緒に旅をするんだよね？」

その景色にウミも見覚えがあったのだろう、俺の様子から何かを感じたようだ。
ウミがモジモジしながら俺のことを上目遣いで見つめている。
なにこの可愛い生き物、抱き締めたい。
ていうか抱き締めた。ついでにキスした。

「んっ！…んっ、はっ…。ちょっと…痛い…かな？」

「あ、悪い。心配するな、俺はまだ帰らないよ。少なくともお前を

置いてはな」

「ホントに？いや、嬉しかったからいいよ。僕は君のものだからね、この体は君の好きにしてくれていいんだよ。」

俺の言葉が嬉しかったのだろう、目を輝かせたウミが両手で体を抱くようにしながらそんなことを言ってきた。

思わず唾を飲み込んでしまう。

体を好きにしていい？それこそ魔法の言葉だ。俺は既に暴走寸前だよ。

しかし辺り一面に広がる荒野を見て少し落ち着く。

「ああ、しかしすっかり話が逸れてしまったな。とりあえずウミの城に行こう」

「うん、そうだね。”キャッスルゲート“」

呪文だったのだろう、光と共に立派な鉄拵えの城門が現れた。

ウミは軽い足取りでその城門をくぐり、直後その体が消えた。

その光景に少し驚くが、転移か何かの魔法だろうと思いながらその城門を躊躇いなくくぐる。

―直後、浮遊感と上下左右がわからなくなる感覚―この世界に来たときに似ている―に襲われ、気付いたときには城の中だった。

そこは所謂ファンタジーの世界に出てくるような想像通りの城だった。

基本は石造りで赤い絨毯が引かれ、大きな扉にシャンデリアの様なもの。

階段があるため少なくとも二階建て以上のようだ。

一通り見渡し最後にウミに目が止まる。

「ようこそ、僕の城へ！歓迎するよ！……。」
最初は満面の笑みだったのが段々悲しそうな顔になり、今では俯きながら指をつつきあわせている。
「？どうした？」
「…名前…知らない…」
そういえば自己紹介なんてしてなかったな。敵だったし。
すっかり忘れてた。
「そうだな、悪い。俺は空、龍宮空だ。家名は龍宮だからソラ・タツミヤの方が通じるのか？」
「ソラか！いい名前だね！いや、龍宮空で通じるよ。他にも似た名前の人がいるし。」
目が一気に輝くウミ。分かりやすいやつだ。
しかし似た名前がいる？そんなこともあると行ってしまえばそれまでだが…少し気になるな。
「それってどういう…」
しかし俺の言葉はウミの唇で遮られてしまった。
「ストップ！もう我慢できないんだ。こっちに来て…。」
ウミに手を引かれついていった先には真っ白い大きなベッドがあっ

た。
所謂天盖式ってやつだ。
しかしこれって…。
「僕を…君のものにして」
いつの間にか既に肩をはだけさせているウミがとろんとした瞳で俺を見つめている。
俺はその瞳に抗えず――…ウミの体に覆い被さった。

6．ウミの城（後書き）

最後は駆け足でした。
すいません、作者が恥ずかしくなりました

感想、評価、アドバイスなどお待ちしています！

7．朝とカレー（前書き）

遅れすぎた更新を深くお詫び申し上げます
しかし今回は繋ぎの話です。少し進めるつもりが予想外に長くなりすぎました

7. 朝とカレー

窓から漏れる光で目を覚ます。隣にはウミの顔、うむ、可愛い。
昨日は結局ウミが可愛すぎてかなり激しくなってしまった。
しかしそこはさすが魔族のウミ、きっちりついてきていたが。
ウミの髪に手櫛を通す、さらさらだ。そしていい臭いもする。それに汗の臭いもするが不快ではない。
そんなことをしているとウミが目を覚ました

「ん・・」

なんか色っぽいな

「悪い、起こしたか？」

「ううん、いいよ。おはよう、空」

微笑みを向けるウミに俺も笑顔を返す

「ああ、おはよう、ウミ」

そこでウミは何かに気づいたようだ。少し考えると悪戯っぽい顔になる

「それにしても昨日は激しかったね、キミの臭いが僕についているよ？」

「うるさい、お前が可愛すぎるのが悪い」

だって、この体はキミのものだから好きにしていいとか、キミを受け入れることができて嬉しいとか、もっと強く抱きしめてくれとかいうだぞ？抑えられるわけがあるだろうか？いや、ない！

そういうとウミはいっそう笑みを深くして自らの体をその手に抱いた

「嬉しいことをいってくれるね？キミが喜んでくれたみたいで僕も嬉しいよ。何せ今の僕の一番の幸せはキミを喜ばせることなんだからね？」

・・・俺を殺す気か！

しかも自分の体を抱いているせいで決して大きくない胸が強調されてそれなりに深い谷間を作り出している。特に巨乳に興味があるわけではないがやっぱり谷間って男のロマンだと思うんだ。

この後もう1戦に励んだのはいうまでもない

少し時間は過ぎようやく寝室から出てきた。

腹が減ったからだ。何か食い物はあるかとウミに問うたら無い、と返ってきた。

曰く

「僕たち魔族は魔力が周りにあれば生きられるからね、食べる必要性は全くないんだよ。娯楽として食事する同族はいるけど僕はそこのところに興味が持てなかったからね。腐ったら酷い臭いを発するし・・・。だからなにもないんだ。」

とのこと。

しかし腹が減って仕方ない！
そうか、家に戻って飯を持ってくればいいんだ。

「どこでも・・・」

いや、さすがにこのネーミングはまずいのか？しかも俺には馴染みが深いがよく考えると若干間抜けなネーミングだ、格好悪いとウミに嫌われたら困る。いや、そんなことはないだろうが
しかしどうするか・・・

「異界の扉（アナザーゲート）」

こういうものはわかりやすさが一番だと俺は思う。
名前が変わったからだろうか、俺が若干想像を変えたためだろうか、そこには昨日現れたあのピンク色の扉ではなく、黒く重厚に光る両開きの扉が出てきた。

「じゃあウミ、ちょっと待っててくれ、３０分位で戻ると思う」

そう告げ、返事も待たずその扉を両手で押し開き、確認もせずに飛び込む。
もう3度目になり少しずつ慣れてきた浮遊感が収まるのを待ち、あたりを見渡す。
確かに元の世界、地球だった。
そのことを認識すると同時に魔力が全くないことに気づく。
なるほど、確かにこの世界なら魔力がエネルギー源のウミは力が出せないか、道理で力に差がありすぎると思った。

「おっと、飯飯」

幸いここは俺の家のすぐ近くだ、家の冷蔵庫ならなんかあるだろ
全力で走ったため一瞬で家に着く。なんか身体能力が上がってる気がする
そのまま台所を物色する。どうやら昨日はカレーだったようだ、鍋にカレーが残っている。
ラッキー、俺は日本のカレーは世界に誇る国民食だと思ってるからな。
皿に二人分米とカレーを盛りつけ、ついでに福神漬けを盛りさぁ帰るか。
あれ？帰る時ってどうすりゃいいんだ？来た時と同じでいいのかな？

「異界の扉（アナザーゲート）」

どうやら体内に魔力があるためこちらの世界でも問題なく使えるようだ。
しかし、体内の魔力が減ったのがわかる。向こうではきっと使った端から回復してるからわからなかったんだろうな。

扉に手をかけ、少し思う。こちらでの暮らし
確かに俺を震えさせてくれるような強者はいなかったが親父がいて、爺さんがいて、あいつがいてー・・・。

まぁいいか！いつでも帰ってこれるんだし！寂しくなったら少し里帰りすりゃいいんだ！そのときはウミを彼女だなんて紹介したりしてな！

・・・またな、みんな

扉を開き、飛び込む

・・・この浮遊感はどうにかならんもんかな

「おかえり」

「ああ、ただいま」

そのまま二人で食事をする。その際にウミが「なんだいこの美味しいものは！これがキミの世界の料理なのかい？もっと食べたい！」と、カレーに大ハマリしてしまったのは余談だろう

7．朝とカレー（後書き）

感想、評価、アドバイス等々いつでもお待ちしています！

8．旅に・・・出れない（前書き）

スローペースですが見捨てずに読んでください

8．旅に・・・出れない

「旅に出る？」
「ああ、もともと俺がこの世界に残った目的は強いやつと戦うためだからな。」

ウミの城に来てから1週間が過ぎた。
その1週間の間はウミと組み手をして魔力の扱い方に慣れたり、ウミとイチャイチャしたりしていた。
もちろんそうして過ごしていた時間もとても楽しく有意義なものであったが、元々の目的を見失うほど俺はバカではない。
何よりもウミと組み手を行い魔力に触れることで、もっと強いやつと戦ってみたい、この世界の魔法を受け、それを破りたいという気持ちがだんだん強くなってきていた。

そうしてその気持ちを素直に出した訳なのだがウミは何とも微妙な顔をして首を捻っている。

「それはいいんだけど・・・アテは・・・あるわけ無いよね？」
「適当に暴れてうろついていたら強いやつも興味もって近づいてくるんじゃないか？」

確かにアテはないがそんなものはどうにでもなるだろう。地球（むこう）に居たときだって俺は別に何もしてないのにほぼ毎日強者ーまあそれほどでもなかったがーに襲われる毎日だったからな。俺みたいに強いやつと戦いたいってやつも勿論いるだろうし。
それにこの城から出てその辺を見回してみてもなんだかはよくわからないが凶暴そうな生物がうろついているからな、そいつらと戦ってみるのも面白いだろう

「さすがに行き当たりばったりすぎるんじゃないかな？」
苦笑したウミは更に続けてきた。
「そのやり方も一つの方法だけど偶然に頼る面が大きすぎるんじゃないかな？それよりは僕に一つアテってほどではないけど考えがあるよ」
アテがあるんだったらそれに越したことはない。
ウミは一つ指を立て話し続ける。
「この世界には大きく5つの大陸があってそれぞれの大陸にはそれぞれの種族の単一国家があり、ここはその中でも魔の大陸だという話はしたね？だけどここ魔の大陸には他種族の町ー砦のようなものといっても差し支えないけどね？があるんだ。で、それぞれの町には魔族を討伐しようと種族ごとの実力者が集まっているんだ。きっとその町のどこかに向かえばキミのいう強者と出会えるんじゃないかな？」
そう言いウミは俺に笑顔を向ける。
なんだよ、それ・・・。そんな・そんな・・・
意図せず俯き、震えてしまう。
「僕たちは別に気にしてないからキミも気にしなくていい・・・」
「なーんだよーー！そんないいい方法があるなら早く言えよ？！全然そっちの方がいいじゃんかー！ん？なんかいったか？」
溜めた力を拳に乗せ振り上げる。
しかしウミがなんか言ってたような・・・気のせいか？

「・・いや、君は不思議に思わないのかい？なぜ僕たち魔族が討伐対象になっているのか。キミの世界には人族だけで他種族との対立もなかったんだろう？」
「ん？ああ、確かにそうだけど本とかゲームじゃそういうもんってことだったからな。あーと、魔族は凶悪な姿や優れた力を持って、他種族に害を為すために自衛目的に魔族を討伐するって言う話がお約束だった。」
「・・・だいたいその通りなんだけどね、どうしてそこまでキミの世界で僕たちの世界のことが伝わっているか不思議だね？・・・だけど姿が違うのはほかの種族だって同じだし、力だってそれぞれの種族ごとに他の種族より優れているところがあるんだ。他種族に害を為すっていう面だって他の種族も僕たち魔族に害を為しているんじゃないかって思うんだけどね？もう慣れたものだけど。」

そういい、ウミは自嘲するような笑みを見せた。その顔は寂しそうでどこかここではない遠くを見ているようだった。
俺としてはそんな種族間の対立には興味は無くただ強いやつと戦えればそれでいいんだが・・・。だけどウミが寂しそうな顔をしているのはなんだか面白くないな！まぁ今の俺が考えてもどうにもならないからいつか機会があったらどうにかしたいな。

「ん？そうしたら町に近づくのはまずいんじゃないのか？ウミは魔族だろ？狙われない？」

まぁ狙われても俺が守るけどな！ウミも一定以上の実力はあるしこっちの世界の基準がわからないけど自衛くらいはできるだろ。
そんなに心配しなくてもいいことかもしれないが・・・。

「ああ、元の姿のままだったらそうだったかもしれないけどね。僕

はキミの影響で今の姿になったし、それにここから一番近い町は人族の町だから言動にさえ気をつけていれば大丈夫だと思うよ？」
「そうか、じゃあ早速その町に向かって出発しようか」
「そうだね、ここから南西に向かって半日ほど歩けば海が見えてくる。そこから数刻も歩けば町が見えてくるよ」
「わかった！じゃあ出発だ！」

俺たちは城から出て町に向かって歩き出す。と、高い声が響いてきた。

「待て！」

そこには戦国時代の具足のようなものを身につけた金髪碧眼の美少女が鋭い目でこちらを睨み付けていた。
その手には日本刀のようなものが握られており、居合いの構えで俺たちに相対していた。なかなかのさっきを放っており、それなりの使い手だと言うことが窺える。

あれ？なんで俺らこんな目に遭ってるの？

8．旅に・・・出れない（後書き）

感想、評価、アドバイス等々お待ちしております！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6959r/

不落の龍神

2011年11月4日21時15分発行